

謹 啓

皆様のご支援とご協力を得て、進めてまいりました
第 15 回関西建築家新人賞が、この程その審査を終了
し受賞者が決定いたしましたので別紙の通り発表
いたします。

2025 年 5 月 29 日

公益社団法人 日本建築家協会近畿支部
支 部 長 松 尾 和 生

発 表

■第15回関西建築家新人賞受賞者(1人)及び審査に提出された作品

○受賞者

新森 雄大(にいもり ゆうだい)

一級建築士事務所 Niimori Jamison

(京都市左京区田中西高原町 17-10)

日本建築家協会(JIA)正会員 1986年生まれ

作品名「pedestals」

用途	構造	延床面積	所在地	竣工年
休憩所兼ギャラリー	木造	19.44 m ²	神戸市垂水区	2024年

■審査経過の概要

- ・JIA 近畿支部による関西建築家新人賞は近畿支部地域で活躍する45歳以下のJIA会員に対し、設計活動に携わる意欲に満ち溢れた建築家の育成と発掘のために設置しています。今回はその第15回目であり、2025年2月1日に募集を開始した。(2025年3月21日締切)
- ・今回の募集は、近畿支部地域内に2019年1月1日～2025年2月28日迄の間に建てられた建築1点を審査対象とし、その建築活動を行った建築家に対して与えられるものである。
- ・受賞者にはJIA近畿支部から賞状が贈られる。
- ・審査員は以下3氏で構成。
岸下真理氏(審査員長)、倉方俊輔(審査員)、田口雅一(審査員)
- ・今回は8人から応募があり、書類審査(図面・写真による審査)及び現地審査を行った。
- ・審査は順調に行なわれ、5月17日に受賞者を決定した。

■表彰式

- ・2025年5月29日開催の(公社)日本建築家協会近畿支部通常総会にて実施。

第 15 回 関西建築家新人賞 審査講評

今回で 15 回目を迎えた関西建築家新人賞は、日本建築家協会近畿支部が関西の若手建築家の育成と発掘を目的として 2006 年から開催されてきたもので、これまでも多くの建築家の卵たちを温め、そして孵った雛たちの背中を押してきた。

応募要項には、この賞の趣旨として「地域特性に対する配慮や作品の芸術性などの観点から総合的に判断し、将来性があると期待される建築家に対して与えるもの」とある。つまり、建築作品を見つつも、それを通して見えてくる建築家の将来性を判断することが重要であると私は理解している。

前年の関西建築家大賞受賞者が審査員長を務めるというルールにより、今回は私がその大役を担うことになった訳であるが、一緒に審査を行う相棒として、長年のお付き合いもあり、そして何より私が信頼を寄せる倉方俊輔氏と田口雅一氏のお二人に審査員をお願いすることとした。

今回の応募者数は 8 名と例年に比べ少数ではあったが、いずれの応募作品も力作であり、質の高い優れた建築作品ばかりであった。まずは書類審査により、3 名の建築作品について現地審査を行うことを審査員 3 名の合意のもと決定した。

■ 新森 雄大「pedestals」

小さな建築のリノベーションである。一見すると塩屋の町に溶け込むごく普通の古い建物に見えるが、しかしよく見ると何かがおかしい。設計者が「台座」と呼ぶ、「基礎の様なもの」と「柱の様なもの」と「スラブの様なもの」で構成された下層部分と、外壁や屋根がそのまま残る既存の上層部分に、繊細な操作で、しかし明確に分割されている。その外観はある種の違和感を感じさせるものであると同時に、この場所に流れる時間を積極的に繋いでいこうとする設計者の強い想いを私に感じさせるものでもあった。それはまた、設計者自らがこの建築のオーナーとなり、主要用途であるギャラリーの企画・運営・管理を行い、地域との関係を築いていこうと活動していることから強く感じた。

現地審査当日、土砂降りの雨の中をずぶ濡れになりながらこの建築を訪れた際に、設計者が周辺地域のリサーチから導き出したと説明する 1 階の「休憩所」が私たち審査員を優しく迎え入れてくれた。現代建築の多くが忘れてしまっている本来の意味での「公共性」を感じることができたことは、この建築を理解する上でとても重要なことであった。

急な外部階段を登り踊り口状の入口を入ると現れる 2 階のギャラリーも不思議な空間である。余計なことはせず最小限の手数で最大限の効果を引き出すという設計者のある種の知的な振る舞いが既存建物を全く違った空間へと変容させていた。

■ 齊藤 智士「壤と家」

淡路島に建つ夫婦と子供4人のための住宅である。クライアントが農業と牛飼いを生業とされていることから、この住宅は設計者がイメージしたという「里山の農家住宅」の現代版といったところであろうか。広々とした敷地と一体となり、内部と外部が緩やかに繋がる住空間は、明るく、風通しも良く、幸せな家族生活のために用意されたまさに「舞台」のような住まいであり、ここに住まう家族だけでなく、ここを訪れるその他の人々までもを幸せにする建築であると、私に感じさせるものであった。

もともと田んぼであったという敷地特性を、建築が必要とする構造的な要求と合致させつつ、そのことがこの場所での外観上の配慮(北側に建つの母屋との関係性)や内部空間における大地との親密性に繋がっており、設計者のその場所の特性を読み込む力の確かさとその処理能力の高さを高く評価したい。

現地審査当日、クライアントご家族が普段通り土曜日の午後を過ごしながらも、我々審査員を快く迎えてくださったことが、クライアントがこの住宅に満足し、設計者とも良好な関係を築いていることを物語っており、それが住宅にとって何より大切なことだと信じている私に大きな満足感をもたらしてくれた。

現地審査にご協力いただいたクライアントご家族に心より感謝を申し上げたい。

■ 京 智健「中道のアトリエ」

設計者自らのアトリエ兼自宅である。目の前を通るのは近くの神社の参道であり、奈良へと向かう古い街道の入口として栄えた記憶を留める細い通りである。その通りに対して閉じるのではなく、周辺環境と緩やかな関係を築くことを目指した建築である。

長屋が建っていた敷地の特性を活かしながら、奥行き方向への空間構成に構造形式も含めた多くの工夫と配慮を重ねることで、設計者の言う「参道に寄り添う長屋」が実現されており、その設計力と建築としてまとめ上げる能力の高さを感じた。

また、設計者自身がこの建築のメインの利用者でもあるということを最大限に活用し、使用素材や工法、ディテールの納まりなど、今後の設計に活かすための実験的な試みが積極的に行われていたことも建築家の姿勢として高く評価したい。

ただ、周辺環境の著しい変化を目の当たりにする時、この建築がこの場所でどのような時間を重ねていくのかが、まだ今の状況では見えにくく、今後、近くに実現されるという2軒の住宅も含めた面的な広がりを通して、設計者の思い描く「奥行きのある暮らし」が実現されていくのかを見てみたいと思った。

□ 総評

3名の建築家のそれぞれの建築作品を現地審査する中で、新森さんからは「信念」を、斉藤さんからは「誠実さ」を、そして京さんからは「実行力」を強く感じ取った。どれもが建築家にとっては備えるべき重要なものであり、3名が既に素晴らしい建築家であることは、審査員全員が認めるところである。

建築の価値とは、そもそも一様なものではなく、それぞれに独自の世界が広がり、豊かな社会と繋がる多様なものである。その中で今回は審査員3名の合意により、新森雄大さんに関西建築家新人賞を授与することとなった。

その選考理由には審査員それぞれに異なる視点があるのではないかとと思われるが、今回、私は「あらゆるモノやコトを常にフラットに取り扱おうとする意志と振る舞いこそが、これからの建築家像を表象しているのではないか…」という自らの予感を信じ、また今後の活躍への期待も込めて新森さんを推すこととした。

審査員長という重責を担うのは少なからず精神的な負担ではあったが、一方で今回の審査は私自身にとっても多くの学びを得る貴重な機会となった。この場をお借りして倉方さんと田口さんに、そしてこの賞の運営を担っている事務局と表彰委員会の関係者の皆様に心より感謝を申し上げたい。

審査員長／岸下真理

「pedestals」 新森雄大

「関西建築家新人賞」が字義通りに「関西」の「建築家」の「新人」に与える賞だとしたら、それに最もふさわしいのが本作ではないか。

「関西」には、いい場所がたくさんある。本作が立地する塩屋は、その一つである。海を臨み、山に近い傾斜地は、歴史を重ねた居住地であり、例えば東京近郊のように経済的な圧力が強くないために、個人の顔が見えるような古い店舗と新たな試みとが共存している。そんな街に、本作は1階と2階を大胆に切り分けた改修設計を通じて、休憩所とギャラリーという宿り木のような機能を付加した。このように設計者自らが建て主となって街の個性を前進させていくことが、関西で可能だと示したと言える。本作に鼓舞されて、同様の活動が他地域でも続いたらと思う。

「建築家」としての姿勢で、この活動は行われている。1階の柱のふかしや2階のインテリアといった印象的な存在は、構法や機能に裏打ちされているが、それだけで決定されていないことは明らかだ。1階は土地の傾斜や身体スケールを意識させるものでありながら、それだけに回収されない建築としてのよそよそしさを備えている。2階に上がると1階の経験からは一転するが、そのことはすでに外観で予告されていた。不整形な敷地なりに室内を設えたがゆえの鋭角や、小屋組の妙味が、まるで建築家が技巧的にデザインしたもののように身体に飛び込んでくるが、これらはすでにあった要素である。丁寧に、少し不思議に設計された照明や什器などが、そんな感覚を支えている。

「新人」らしさを、既存の事物の改修を通じてこそ、建築が備えるべき豊かさが回復できることを示したその姿勢に見ることができる。時代に即しながら、時代に流されない、建築家というものの関西におけるあり方を今後、さらに切り拓かれることを期待している。

「壤と家」 齊藤智士

本当に気持ち良い家だった。家庭や住宅の暖かさ、といった時に、ともすれば付随しがちかもしれない内向的な、湿度の高さが感じられない。かといって、生活感が感じられない冷たさとも無縁である。風が抜け、光が注ぎ、視線の向こうに緑が見える。家族それぞれが自律した一人の人間として、時に応じて自分の居場所を見つけ、自然と共同しあえる。そんな空気がつくられていた。天井高や壁面の仕上げなどの設計の巧さがそれを可能にしている。周辺環境や家族のありようを丹念に読み解きながら、べたつかない明瞭な解答を与えていた。住み手の幸せそうな姿も、強く印象に刻まれた。聞けば、その作品を目にして、本作が依頼されたという。選ばれ、望まれて、人生をつくる大事な場所を築いていく、建築家という存在の崇高さを改めて感じさせられた。

「中道のアトリエ」京智健

つくり手であり使い手が、この決して明瞭ではない、昔ながらの街並みの香りをまだ残す
界限に愛着を持っていることがよく分かる。神社の参道に続く通りに面した敷地に、鉄筋コ
ンクリートの基礎を大きく持ち上げた形で木造 2 階建てを築き、筋交いを渡す。そのこと
によって外光を豊富に採り入れながらも、決して広くない場所が分節されて、長屋形状の敷
地を精神的に豊かなものにする手法が示されていた。前面の道との開かれた関係も、こうし
た界限だからこそである。上部からの採光も効いていて、そこから上がった屋上からの眺め
も、まちなか居住の良さを引き立てている。

自身のアトリエ兼住宅であるからこそ今回、施工にも関わり、実験的な試みもなされたと聞
く。近隣にはいくつかのプロジェクトが進行中だという。明快な手法と、細やかなスケール
への愛が共存したこの作品から、建築家としてのさらなる展開が予感され、楽しみである。

審査員／倉方俊輔

pedestals 新森雄大

まるでタルコフスキーの映画の世界に迷い込んだような「違和感」の連続である。一次審査では全くノーマークだった私に、岸下委員長の「アート？」という問いかけ対する違和感。現地審査であたかも仕組まれた演出のような嵐の中、不安に満ちた道中と穏やかな作品の軒下を体験する違和感。作者のプレゼンで強調される建築言語に対する違和感。1 階柱幅が「人がたのオーダー」と聞いて、妙に納得してしまう違和感。階段から 2 階ギャラリーへ入る時の蹴り口や押入としか思えない洗面・トイレ、ポータブルなのに置場所に運命がある椅子に対する違和感。元々 2 階入口だった作品搬入用開口を開けた時のどこでもドア的場面転換に対する違和感。こんなにも違和感のある建築なのに周辺環境、人、歴史、記憶、様々なモノやコトを繋ぐ装置として機能している違和感。それを自費で建築し、イベントを企画・運営し、楽しそうに、優しい眼差しで語る作者への違和感……。そうか、現代社会の人間は当たり前のようにこんな違和感を感じながら、自分と折り合いをつけながら生きているのだ。作者が目指す建築のあり方は、それを楽観するでもなく、悲観するでもなく、それでもなお希望を持って居心地よく生きていける予感を感じさせる。このような視座を持った建築家こそ、これからの時代に必要とされるのではないかと思える。

壤と家 齊藤 智士

個人的には今回、現地審査した 3 作の中では、最も空間としての質が高かったように感じた。現地審査は pedestals の時と打って変わって、太陽の輝く蒸し暑い状況となったにも関わらず、全体的に開放性が高い上に、中央に配置された気積の大きい土間空間により、心地良い風の流れを感じながらの審査となった。周辺 GL より 900mm ほど 1 階床が下がっていることでアイレベルが下がり、周囲のランドスケープをより一層身近に感じられる設え、土間に 4 か所設けた生活環境に合わせた屋外への出入り口、ミニマムな子供の個室空間と屋外の大地の双方に連続したワークスペース、敷地上部にある母屋の懷に抱かれながらも目障りにならない屋根等々、創意工夫に満ちている。都会にはない、大らかでぜいたくな空間がゆったりとした時間の流れを創出し、クライアントとの良好な関係やその幸せな生活も垣間見え、その力量が存分に発揮された作品と言える。非常に好印象の建築であることは承知の上で敢えて申し上げると、作者の人柄の良さからか、素材のボキャブラリーや収まりの作法の多さが、建築に対峙した時の厳しさにやや欠ける印象を受けたこと、作者自身が体験してきた原風景をもとに構築する建築手法を超える一貫した理念があると更に良かったように思えた。

中道のアトリエ 京 智建

作者が生まれ育った地域にある神社の参道に「寄り添う長屋」の計画である。周辺の長屋のスケールやテクスチャーに調和した木造 2 階建てで、鳥居や道幅のオーダーとエレメントをファサードに活かし、参道に対してオープンなオフィス空間を設けている。室内は張間方向には、強度的にはかなり異方性が大きいと思われるのだが、1~2 階を貫通する 120 角木材方掛け筋違が H=2000mm を天端とする高基礎の上から入れることで、室内の緩やかな分節に寄与しながら、間口は狭くとも奥行方向の一体感を損なっていない。表裏両妻面にはガラスをふんだんに用いているお陰で、長屋特有の暗さもない。桁行方向壁面全面に収納棚が設えてあり、1、2 階共、水廻り家具類もミニマムながらも工夫が凝らしてある。屋上に上がれば、参道や周囲の街並みを見渡すことができ、開放的な空間となっており、多様な居場所が用意されている。作者は過去の経験を生かして分離発注やセルフビルドによる合理的な施工方法を採用し、施工者や協力者と対話を重ねて作品を仕上げているのであろう。またこの建築単体だけでなく、敷地周辺で作者が関わっているプロジェクトと共に地域全体を 1 つの住宅と見立てた地域のリノベーションを模索しているとのことである。ただ個人的には、この敷地だからこそ、空間や言動の中にもう少し人情味のある下町情緒が欲しかった。多分、この建築を通じて、暖かな人の思いや繋がりが醸成されるのにはもう少し時間がかかるように思われ、今後の展開に期待したいと思う。

審査員／田口雅一